

国際交流基金助成事業報告書

薬学部 2年次生 吉田舞衣

関西空港から自宅への道中、イタリアでの日々がまるで走馬灯のように脳内で思い起こされていた。瞬く間に過ぎてしまったその時間に、すべてが一夜の夢の中の出来事であったと錯覚してしまいそうになる。しかし同時に、バスの車窓の向こうでちらちらと花を覗かせる桜の木々に、30日間というイタリア生活の長さを実感させられるのだ。凍てつくような冬空の下、その寒さに耐える裸の木々に別れを告げ、30日前、私は日本を旅立った。

これまでオーストラリア、アメリカへは何度か留学経験はあるものの、ヨーロッパ大陸、ヨーロッパ圏への上陸は今回が初めてであった。最初の乗り換え地であるオランダに降り立ちEUの入国ゲートを通ったとき、英語圏とは明らかに異なる情緒に圧倒されたことを今でも鮮明に覚えている。話が逸れるが、昨年3月に大学にてオランダからの留学生と交流する機会を頂いたことあり、今回の乗り継ぎ地が偶然にもオランダとなったことに何か不思議な縁を感じた。オランダに到着後、今でも連絡を取っているオランダ人の学生とコンタクトを取り合うことが出来たことは、これから始まるヨーロッパでの生活において大きな心の支えとなった。そうして、オランダでの滞在ののち、ローマを経由してフィレンツェへと、特に”大きな”問題はなく、辿り着くことが出来た。

イタリアでは、フィレンツェのかの有名な”ドゥオーモ”こと、”サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂”から徒歩10分ほどのチェントロに位置するアパートメントにて、家主でシチリア出身のNonna(おばあさん)とメキシコ人のルームメイト、2匹の小さな犬たちと寝食を共にした。アメリカ、オーストラリアでのホームステイを経験していた私は、もしかすると単に家庭環境の違いかもしれないが、イタリア人の思慮深さ、丁寧さに日本人として非常に親近感を覚えた。こまめな掃除、洗濯、手の込んだ夕食は日本の文化とそう大差ないものでありとても居心地がよかったのを覚えている。特に夕食については毎晩まるでRistrante(レストラン)に来たかのように、イタリアの伝統的な食事に則り、Primo piatto(第一の皿)としてパスタ、リゾット、またはミネストラ、Secondo piatto(第二の皿)として肉または魚料理などのメインディッシュ、Contorno(つけあわせ)としてサラダ、野菜のグリルまたはチーズ、そしてさいごにDolce(デザート)としてケーキやカントゥッチーニ、フルーツが食卓に並んだ。このような生活を続け、自分の顔と体が見る見る間に肥えていったことは想像に容易い。ところで、30日間という時間の中で、楽しいことがあれば、もちろんそれと同じように悲しいこと、苦しいことも起こるものである。そんな時も家に帰り、かわいい犬たちと戯れ、みんなで食卓につきNonnaのご飯を食べおなか一杯になることで不思議と前向きな気持ちになれた。医食同源と大仰なものまではいかないがイタリア人は食べ物と健康の関連に対し非常に強いこだわりを持っている人が多い。例えば、食卓にたびたび登場したFinocchioはウイキョウの鱗茎であり、確かに油の多いメインディッシュでもFinocchioとともに食べると胃もたれをすることはそれほどなかったようにも思う。科学的に根拠のあるもの、経験則、単なる迷信といろいろな要因があるかもしれないが、イタリア料理には人を前向きに、幸せにする何かしらの効用があるように感じた。

さて、今回の留学は第三外国語としてのヨーロッパ言語、イタリア語習得の為であったのだが、実はイタリア語そのものは、当時勉強を始めわずか4か月足らずの初心者、もとい未熟者であった。それに

も関わらず、何の間違いか、現地の語学学校でのテストとインタビュー後に中級クラスに配属されてしまうという番狂わせが起こってしまった。日本では自己紹介やレストランでの注文で使う会話程度しか習ったことない自分が、いきなりイタリア語でディスカッションやプレゼンテーションを行わなわれないといけない状況、また、指定された教科書の難しさに目を白黒させてしまっていたことは想像に難くないと思われる。基本的な文法事項は文法書を読めば短期間でもある程度の概要は理解できるのかもしれない。一方で、学習期間の差が顕著に表れるのはやはり語彙力、表現力である。その点において私はクラスの誰よりも劣っていた。その事実が悔しくて、寝る時間を惜しんで辞書を引き、紙に穴をあける勢いで教科書を読みこんだ。ただ一つ、イタリア語学習において助けになったのが、“英語の知識”であった。文法はさることながら、同じラテン語ベースの言語ゆえに、英語と関連のあるもの、あるいは綴り・意味がかなり似通った語彙というものがイタリア語には多く存在する。またこれらの単語は読み方も似ている場合があり、イタリア語の単語がどうしても出てこないときは英語を”イタリア語っぽく”発音するとそれがそのままイタリア語として通じる場面も多くあった。もちろん、現地人からはもれなく笑われてしまうのだが。「外来語」として英語から輸入された言葉というものもあり、英語は知識があればあるだけ損はしないということを改めて実感させられた。私は日本の受験にフォーカス、もとい依存した英語教育が嫌いであったが、その時に嫌々詰め込んだ構文や語彙が第三言語の習得に際し大いに助けになっていることは紛れもない事実である。その点では盲目的な日本の英語教育も捨てたものではないのかなと思わされた。

ところで、さすがは愛の国というように、イタリア語学習の教科書には「恋愛」に関する内容というものがたくさん出てくる。例えば、基本中の基本である「自己紹介」を勉強するための例文では、ビーチで水着を着て一人日光浴をする女性に男性が話しかけるというシチュエーション、言わずもがな、「ナンパ」の様子が描かれている。確かに、名前くらいはいいものの、年齢や国籍、込み入った趣味の話をするのに、「ビジネスライクな”お堅い”関係ではなく、ビーチでのナンパのほうの方が自然であるのかもしれない。ちなみに私自身、イタリアの語学学校で最初に課題に出されたテーマは「Colpo di Fulmine」（一目惚れ）についてであった。しかし面白いことに、恋人同士の馴れ初めや昔の恋愛話をディスカッションし、プレゼンテーションする中で、近過去と半過去の違い（英語でいう、過去形と過去完了の違い）や文法上のルールが自然と身についてくるのだ。彼との運命の出会い是一次きりの出来事なので近過去で表現し、その後二人きりで教会の屋上から見た美しいイタリアの街並みはその前もそれから先もずっと存在するものなので半過去で表現するというように。一見ふざけているように思えるが、実はコアカリキュラムに準拠し、非常に考えられてこれらのテーマが選ばれていることに感銘を受けた。

レッスンが終わると、語学学校の友達や街で会った観光客、ツアーで知り合った留学生とともにフィレンツェはもちろん、ピサ、ルッカ、シエナでの観光や、週末には Frecciarossa（イタリア最速の特急列車）に乗り、ヴェネチア、ミラノへの小旅行を行った。見るものすべてが「本物」であるイタリアで、こんなにも贅沢に時間を過ごせたことは人生の中でも本当に貴重な経験を頂けたのだと、しみじみ感じる。ドゥオーモやウフィッツ美術館、ベッキオ橋、ボーボリ庭園、カフェフローリアン、レオナルド・ダ・ヴィンチ国立科学技術博物館、斜塔、ワイナリーなど、挙げるときりがないほど、典型的な”観光スポット”というものを巡り歩いた。しかし、どんなにガイドブックで予習をしても実際に赴き、目で見て、耳で聞き、肌で感じ、現地のコンテクストで捉える経験に勝るものはない。海の青に映え、太陽により輝くサンマルコ寺院の足元で、地に這い、時に観光客に絡り、物乞いをする身窄らしい老婆。表

向きはどんなに美しくとも、その内部に第二次大戦の爪痕を深く残す教会。その日暮らしのパフォーマーから紡がれる美しい音色に彩られたレンガ造りの街並み。そこでは、写真や本では決して知ることのできない、”リアルな非日常”というものを感ずることが出来る。

さて、イタリア滞在中も薬学生としての血がそうさせたのか、あらゆる芸術や歴史的遺産に触れるのと同じくらい、あるいはそれ以上の興味と関心をもって現地の薬局を訪ね歩いた。その中で、フィレンツェのある薬局の薬剤師の方とお話をする機会があり、薬学や医療に纏わる色々な事柄をお聞きすることが出来た。まず、イタリアの薬局であるが100年、150年あるいはそれ以上前からのアンティークな建物を構えるところが多くある。それにはいろいろな理由が考えられるが、街全体が世界遺産として登録されているため簡単に建物を改装するのが難しいのと、イタリアで新規に薬局を開店するにはかなりのコストを要するからということらしい。棚に陳列されているかつて使用されていた薬草を計るための天秤や薬草の名前が書かれた陶器製の薬草入れ、当時のステンドグラスがそのまま嵌め込まれている窓などは、それだけでとても趣があり、自分が薬局にいるということをつい忘れてしまいそうになる。次に興味深かったのがそれら昔からある薬局での医薬品の販売方法である。ミラノなどの近代化した大都市は当てはまらない場合もあるが、フィレンツェのような街ではOTC(一般医薬品)が”over the counter”に存在しない。つまり、薬局に入り周りを見渡すとサプリメント、ホメオパシー(ヨーロッパでポピュラーな代替療法)、ハンドクリームなどの日用品はあるもの、いわゆる「医薬品」というものは陳列されていない。医薬品を購入したい場合は、カウンターの薬剤師に自分の症状、あるいは希望する医薬品を伝え、奥の調剤棚からピックアップしてもらい購入するという流れだ。たとえOTCだとしても、日本のようにふらっとお店に入り、箱の後ろの説明文を眺めながら自分で選んだものをレジへもっていくことが出来ない。もちろんこの仕組みにはメリットもデメリットもあり、今ここで日本とイタリアのどちらが良いかという議論をするつもりはないが、国ごとの薬局の在り方、薬剤師の在り方の顕著な違いに非常に関心を覚えた。また、博物館だけではなく美術館や教会にまでも昔のFarmacia(薬局)を復元した部屋を展示しているところがあったり、教科書の職業を勉強する項目においてもAvvocato(弁護士)に並んでFarmacista(薬剤師)が列挙されていたりするところを見ると、イタリア人にとっての薬局、或いは薬剤師というものがどのような存在であるのかが窺い知れることと思う。

ところで、今まで描写してきた経験や出来事は30日間のイタリアでの生活のほんの一部に過ぎない。あつという間の30日間であったが、思い起こせば本当にたくさんのことに触れられた留学であったのだなど、改めて実感させられる。この留学は準備期間も含め、多くの”運”に恵まれたものであり、それらのおかげでこんなにも充実した留学を完遂することが出来たのだと信じて止まない。イタリア外務省の管轄機関という素晴らしい環境でイタリア語を勉強できるようになったこと、そこから奨学金を頂けたこと、留学費用捻出のために飽きっぽい私がきちんと仕事を続けられるバイト先を見つけられたこと、大学の国際交流に関する助成制度が新しくなったこと、日本・イタリアの両国でたくさんの人の縁に恵まれたこと…決して容易な道のりでは無かったし、涙が出るほどつらい局面に立たされたこともあった。しかし、それでも目標を見失わずに最後までやり通すことが出来たのは、周囲の人の支えがあったからこそだと感じる。「叩けよ、さらば開かれん」という聖書の一説があるが、強い意志と明確な目標を持てば、それに伴い自ずと扉が開かれるのだと思う。私にとってのそれは、人と人との繋がり、ご縁そのものであった。

この留学がこれで完結してしまうのではなく、これからも続く長い道のりを行くための道標となるよ

うに、一つ一つの経験や出会いを大事に留めておきたい。

最後に、今回の留学にご助力頂いたすべての方々に感謝を込めて。
ありがとうございました。

※以下、添付写真あり



語学学校の先生、クラスメートと フィレンツェの伝統的なレストランにて



クラスメート、留学生とのピサへの小旅行



フィレンツェの薬局にて



カウンター内に並ぶ“OTC”



薬局内に展示された陶器製の薬草入れ



レオナルド・ダ・ヴィンチ国立科学技術博物館内にて 17世紀頃の薬局の復元展示